

序 章 異議提起	11
第一章 士林派	33
第一節 朝鮮王朝前期の國家收取体系とその変容	36
I 地租	36
II 貢納・進上	37
III 軍役	39
第二節 士林派と勲旧派	42
I 私と公	42
II 國家收取体系変容の契機	44
第三節 結論	48
第二章 理氣論と四端七情論争	55
第一節 朱子の四端七情論	56
第二節 朝鮮での四端七情論争の経緯	63
第三節 主理主義の四端七情論	66
第四節 主氣主義の四端七情論	70
第三章 郷村・地域編成論	89
第一節 李栗谷	91
I はじめに	91
II 清州牧での西原郷約の失敗	93
III 海州牧での郷約・社倉類の作成と成功	95
一 三つの郷約・社倉類	95
二 郷村構成員	102
三 郷村編成論	108
四 郷所論	120
五 文人素養	122
第二節 李退溪	124
I はじめに	126
II 礼安郷立約条	126

III	温溪洞規	135
IV	上下洞約・郷約の成立	143
V	官と地域	147
第三節	結論	152
第四章 権力編成論		
第一節	李栗谷	175
I	はじめに	177
II	権力主体論	180
一	李栗谷	183
二	朱子との比較	186
III	集権化の契機	189
一	朱子	190
二	李栗谷	193
第二節	李退渓	193
I	はじめに	195
II	権力主体Ⅱ官僚機構	196
一	南北の外敵	205
二	軍制改革	206
三	士禍への態度	208
IV	冊封体制	202
第三節	結論	211
第五章	ナショナリズム	214
第一節	はじめに	223
第二節	主理派と主氣派	229
第三節	李退渓の小中華主義	232
第四節	日本近世思想史との比較	237
第五節	統一國家形成と固有信仰・建国神話	238
第六節	李栗谷と潜在的朝鮮主義Ⅱナショナリズム	246

第七節 朝鮮時代後期における展開

終章 近現代史への展望

補論一 現代韓国における儒者・儒教の記憶と機能 ——朴正熙時代を中心として	277
第一節 紙幣と儒者	277
第二節 韓国における儒教評価の歴史	279
第三節 朴正熙の儒教・儒者論と国家的記憶	281
I 朴正熙への毀譽褒貶	279
II 初期における現状認識と儒教批判	286
III 儒教批判の後退	286
第四節 結びに代えて	286
第一節 はじめに	310
第二節 日本の賃貸借住宅	303
第三節 韓国の賃貸住宅概況	302
I 傳貫(チヨンセ)	325
II 月貫(ウォルセ)	324
III オピステル	325
第四節 傳貫定着の歴史的考察	323
I 従来の説明	332
II 韓国人の人間関係	332
第五節 結びに代えて——住宅文化と韓国社会	337
あとがき	345
索引	